

## 仮想接触仮説の可能性と今後の課題

著者	伊東 武彦
巻	54
ページ	75-87
発行年	2021-07-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00007039/">http://id.nii.ac.jp/1114/00007039/</a>

# 仮想接触仮説の可能性と今後の課題

伊 東 武 彦

## 序論

想像上の肯定的な集団間接触は外集団に対する偏見を低減させるとの仮想接触仮説 (Crisp & Turner, 2009) が提唱されている。これまでの研究によると、外集団のメンバーとの望ましい相互交流をシミュレートすることによって外集団に対する偏見は低減し、将来の接触への意欲を高めることができる」と期待されている。

偏見は異文化間コミュニケーションの阻害要因である。偏見の対象との交流は自らの偏見が露呈する恐れがあるので回避しようとする (Plant & Devine, 2003) ことや、自分の所属集団に対して相手が偏見を持っていることを認識すると差別的対応を受けることを恐れて交流に消極的になる (Tropp, 2006) ことが指摘されている。異文化間コミュニケーションは、文化背景の異なる相手すなわち外集団とのコミュニケーションによる相互理解をめざす。それを阻もうとする偏見を低減させる方法を探ることは、この領域にとって重要課題である。

本論では仮想接触仮説の概要と理論的根拠、さらに研究事例を紹介した上で、その可能性と今後の課題を論じる。

## 1. 接触仮説

仮想接触仮説は、20 世紀半ばに提唱された接触仮説 (Allport, 1954) の延長線上に展開される。まずは起点となる接触仮説の理解が求められる。偏見とは、ある集団に所属している人が単にその集団に所属しているとの理由だけで向けられる否定的な態度である。Allport (1954) は、他の集団に対する偏見はその集団に対する正確な情報の欠如が主な原因なので、相手と接触する機会を増やして真の情報を得ることによって低減するとの接触仮説を提唱した。しかし、接触回数が多ければ、もしくは接触期間が長ければ効果をもたらす訳ではない。その接触が偏見を低減させるために必要な条件があり、

それらは、①地位の対等性（接触する人間同士が対等の関係であること）、②共通目的の追求（競争関係ではなく、共通の目標を追求する協力的関係にあること）、③人間性への認識（互いの人間性の認識を促す接触であること）、④制度的是認（権威ある者が、接触を肯定的なものであると認めていること）だとされる。

この仮説提起を受けて、民族的外集団に対する偏見を低減させる接触についての膨大な実証研究が行われた。Pettigrew & Tropp (2006) は多数の研究のメタ分析によって、上記の条件が満たされた集団間接触は偏見の低減に効果があることを確認した。Amir (1969) は、接触した相手がステレオタイプに反する特徴を持っていることが偏見を低減させる前提だと考え、接触仮説が機能する条件として「反ステレオタイプの情報」を追加した。また、当初は所属する集団を極力意識しない個人同士の接触が望ましいと考えられたが、Brown & Hewstone (2005) は「典型性」を重要な要素として挙げた。接触する相手が所属集団を代表する典型的な人物として認識されなければ、その相手との間にたとえ友情が成立したとしても例外的事例として扱われてその集団への偏見は低減しないと考えた。

研究者は多様な接触形態を観察し、条件を満たした接触はメンバーの不安を軽減してグループ間に友情を生み、様々な情動的仲介プロセスを介して機能することを確認した (Levin et al., 2003; Hodson et al., 2009)。

## 2. 間接接触

接触仮説の前提は、2つの集団のメンバーが直接接触する機会を持つことである。しかしそれが不可能な場合があり、直接接触の限界を超える試みが模索された。その一つが拡張接触 (Wright et al., 1997) である。外集団に対する偏見の低減は、内集団の他のメンバーが体験した友情を想像すること、言わば代理的友情によっても生じる可能性があるとの考えである。外集団のメンバーが内集団のメンバーに対して友好的で肯定的な態度を持つことが観察されると、集団間の交流に対する期待は上昇する可能性がある。同様に、内集団のメンバーによる外集団のメンバーに対する寛容な対応に接すると、それを行動規範とすることで外集団に対してより肯定的な態度が生まれることも確認された (Wright et al., 1997)

拡張接触に関する研究は、直接接触は集団間の関係改善のための唯一の方

法ではないことを示す点で重要であった。しかし、それにも限界があった。世界には、集団間の交流が完全に遮断された場所や集団間の激しい対立が刻み込まれた歴史を持つ地域があり、そこでは外集団のメンバーと友情を築けた者が皆無である可能性が高く、拡張接触の成立基盤である代理的友情が存在しえない。これが厳しい人種隔離政策が行われた地域、あるいは長きにわたる民族間紛争に苦しむ人々の現実である。

他のメンバーが体験した友情を知ることによって自己の態度を改善することができるのなら、その友情が実在しなかったとしても、外集団のメンバーとの友好的な交流を想像することによって外集団への態度を好転させられるのではないか。この可能性を追求して生まれたのが、仮想接触仮説である。接触仮説から拡張接触を経て仮想接触仮説へと至る流れは、接触の概念を直接的なレベルから拡張されたレベル、さらに仮想のレベルへと拡大していく過程であった。

### 3. 仮想接触仮説

仮想接触は、「外集団のメンバーとの社会的相互作用のシミュレーション」と定義される (Crisp & Turner, 2009: 234)。望ましい接触体験のシミュレーションは外集団に対する肯定的な感情と認識を生み出し、将来の接触への意欲を高めると想定される。すなわち、仮想接触は実際の接触のための有効な最初のステップとして期待される。この期待に加えて、仮想接触は心理的、物理的かつ経済的メリットも持つ。外集団に対する否定的ステレオタイプの影響で接触を回避する状況においても、外集団のメンバーが不在の地域でも、接触のために費用をかけられない環境下でも、仮想接触は可能である。

基本的な仮想接触タスクは、シミュレーションと肯定的トーンという2つの要素から成る。参加者は次のように指示される。「外集団の初対面の人物に会うことを想像してください。その人物との交流は肯定的で、リラックスしていて、快適であると想像してください。」この指示通りに肯定的な交流を想像することができた場合に仮想接触は機能することが判明した (Stathi & Crisp, 2008)。方向性が示されない交流は否定的トーンを帯びて機能不全となる危険性があるので、肯定的トーンを保つ配慮が必要である。

仮想接触タスクが首尾よく達成されると効果が生まれるが、不首尾の状態では外集団のメンバーを想像すると偏見は増幅される可能性があることが示唆

された (Turner et al., 2007)。肯定的交流を想像することは、仮想接触を機能させるための必要条件である。

Turner et al. (2007) の一連の実験から、仮想接触仮説研究の実例を示す。若年の参加者が集められ、実験群は年配の初対面の人物との交流を、対照群は屋外シーンを想像することを求められた。参加者はそれぞれが想像した内容を記述した後、年配者あるいは若者との交流のどちらを好むかと尋ねられた。対照群は年配者よりも若者の交流を好む傾向があったが、実験群は若者と年配者の交流を等しく好んだ。実験群の年配者に対する偏見は、仮想接触によって大幅に減少したことが示される。

次の実験では、ゲイの男性に対して異性愛者が持つ態度に与える影響を調査した。異性愛者の男子大学生の参加者は、電車内におけるゲイの男性との会話を想像する実験群と、単独のハイキングを想像する対照群に分けられた。それに続いて、ゲイの男性に対する評価を行った。評価項目は、ポジティブあるいはネガティブ、友好的あるいは敵対的、疑わしいあるいは信頼できるなどであった。それらの評価項目に関して、ゲイの男性の間にはどの程度のばらつきがあるかについても回答した。その質問は、「彼らはお互いに似ているか」あるいは「彼らには様々なタイプの人々がいるか」である。ゲイの男性との望ましい交流を想像した参加者は彼らをより肯定的に評価し、ゲイの男性には多様性が存在するので個の相違は大きいと判断した。

その後、メキシコのメスティーソ（白人と先住民族との混血）に対するメキシコ人の態度 (Stathi & Crisp, 2008)、イスラム教徒に対する非イスラム教徒の態度 (Husnu & Crisp, 2010)、不法移民 (Harwood et al., 2010)、および亡命希望者に対する英国 10 代の青少年の態度 (Vezzali, et al., 2013)、統合失調症の人々に対する態度 (West et al., 2011) に対して、より肯定的な感情のおよび認知的態度を生み出す可能性が示唆された。

#### 4. 潜在的偏見

偏見には、意識下で観察できる顕在的 (explicit) 領域と意識下では把握できない潜在的 (implicit) 領域があり、後者については科学的測定が不可能とされてきた。潜在的偏見は顕在的偏見よりも差別的行動の予兆となり得る。潜在的偏見は、偏見を持つ外集団のメンバーと対話する際のアイコンタクト、ジェスチャー、および声の音調などの非言語的な側面に露見する

(Dovidio et al., 2002: 63)。すなわち、偏見の対象に対してはアイコンタクトの頻度が低くなり、落ち着きを欠き、冷淡な返事をすると言われている。

Greenwald & Banaji (1995) は、個人の社会的行動は潜在的偏見に影響されると主張した。彼らは潜在連合テスト (Implicit Association Test: IAT) を開発し、コンピュータ・プログラムによって潜在的偏見の強さを評価した。被験者は、異なる人種的背景を示す顔写真と肯定的または否定的単語を表示する画面を観察し、人種的背景 X の顔を見た時には肯定的単語を、人種的背景 Y の顔を見た時には否定的単語をクリックするように指示される。続いて関連づけを逆にしてそのプロセスを繰り返す。被験者がより速くクリックすれば、より大きな潜在的関連が存在すると判断される。例として、白人の顔を見ている時に「幸せ」をクリックすると、その被験者が白人とポジティブな特性の間に密接な潜在的関連を持っていることを意味する。もしクリックの時間が短ければその被験者にとって白人と肯定的特性の関連づけは容易であり、もし時間が長ければ困難であることを意味する。IAT はその後の多数の実験を経て、潜在的偏見測定の高信頼性を高めている。

IAT を用いて偏見低減を主張した初期の研究には、イスラム教徒に対する偏見についての実験 (Greenwald et al., 1998) がある。参加者はイスラム教徒とのリラックスした前向きで快適な出会いの想像を求められる実験群と、単にイスラム教徒について考えるように指示される対照群に分けられた。IAT によって、実験群は対照群よりも偏見が少ないことが明らかになった。

顕在的偏見の測定においては、参加者が実験趣旨を推測して実験者の期待に沿って反応する可能性を否定できない。しかし IAT による潜在的偏見の測定は、顕在的偏見の測定と比較してノイズが入り込む余地は低くなる (Turner & Crisp, 2010)。

## 5. 自己効力感

偏見を低減させる決定要因は自己効力感だと考えられている。コミュニケーションの領域における自己効力感とは、曖昧、予測不可能、さらにストレス要因を含む将来の状況への対処に必要な一連の行動を効果的に取れると信じる事 (Bandura & Schunk, 1981: 587) である。それは仮想接触においては、「外集団のメンバーに対して、偏見に基づくと解釈されかねない言動を避けて効果的に対話する能力への自信」 (Crisp & Turner, 2012: 25) と定

義される。自己効力感は、外集団のメンバーとの接触を試みようとする人々にとって、その意欲を上昇もしくは低下させる要因として作用する。

Bandura (1986) は、社会的認知学習理論 (social cognitive theory) の中で接触における自己効力感を測定する尺度を開発し、接触においてこの尺度を使用するための理論的根拠を提供した。

自己効力感は、精神的シミュレーションによって高められることがこれまでの研究から明らかにされている。Feltz & Riessinger (1990) は、イメージ・プログラムを受けた参加者は、筋肉持久力を測定する課題に際してより高い成績を上げられると考え、実際に優れた結果を発揮したと報告した。Landau et al. (2002) は、重い物体を持ち上げることを想像した参加者は、それが可能と信じる割合が高くなったと報告した。同様に Jones et al. (2002) は、女性の初心者登山家の自己効力感のレベルを上昇させるイメージを発見した。

これらから、Stathi et al. (2011) は、接触体験のメンタル・シミュレーションは接触における自己効力感を上昇させられると結論づけた。実験 1 では、接触の自己効力感尺度 (Gudykunst & Nishida (1986)) を用いて測定した。その尺度には、英国のイスラム教徒との相互交流についての自信を測定する 9 つの項目が設定された (例: 「英国のイスラム教徒と交流するとき」… 「彼らの態度を予測する能力に自信があります」および「彼らのコミュニケーションの意欲を予測する能力に自信があります」)。その結果は、メンタル・シミュレーションによる接触は自己効力感を高め、実際のグループ間相互交流の準備として機能すると主張した。実験 2 と 3 では、接触の自己効力感とは Fan & Mak (1998) の社会的自己効力感測定の修正版を用いて測定された。これは、相互交流の文脈における自己効力感を測定する尺度である。その尺度は 6 つの項目で構成され、参加者は将来の英国に居住するイスラム教徒との交流について考え、次の意見に同意するか否かを問われた。「英国のイスラム教徒と英国人との会話に共通のトピックがあると感じる。」この実験においても、接触を想像すると接触の自己効力感が高まると結論づけられた。

これらの研究は、接触を想像することは外集団のメンバーに対する態度を好転させるだけでなく、グループ間の実際の接触に対する自信を高めることを示している。



## 6. 最新研究事例

研究事例が増えると共に、参加者の立場や年齢、外集団として設定される対象のカテゴリー、参加者と対象者の関係性、そして介入手法における多様性が増してきている。全体としては仮想接触の効果を示す研究が多いが、限定的効果、あるいは効果が現れない事例も報告されている。その順番にいくつかの研究を紹介することによって最新の研究動向を明らかにする。

Stathi et. al. (2014) は、ロンドンの小学校の白人児童を参加者とし、児童たちは3週間の期間、週に1回アジア人の子どもと交流することを想像した実験群と想像しなかった対照群に分けられた。実験群の児童は対照群と比較して、より肯定的な態度で集団間の接触に対して意欲を示した。学校教育のための偏見低減技術の開発の効果が議論されている。

Shamloo et. al. (2018) は、写真の情報に基づいてイメージを形成させることによって仮想接触を実施した。イタリア語を母語とする127名の北イタリアの大学生を参加者として、研究1では白い手が黒い手に触れている写真（集団外物理的接触状態）と屋外シーンの写真が用意され、参加者はどちらかを想像することを求められた。結果は、物理的接触状態を想像した参加者は集団間の偏見を低減させた。研究2では、参加者は白い手が別の白い手に触れている写真（集団内物理的接触状態）を見て想像を求められた。分析の結果、集団外物理的接触は集団内物理的接触よりも集団間の偏見を低減させることが明らかになった。

仮想接触は、人間性の認識に望ましい影響を与える可能性がある。Falvo et. al. (2015) は、ホームレスの人々への人間性に対する認識を改善する手段として仮想接触を検討した。80名の大学生の参加者は、初対面のホームレスの人物との良好な交流を想像する実験群と風景を想像する対照群に分けられた。実験群には「あなたはそのホームレスに、楽しく、興味深く、予期しなかった面があることに気づく」と伝え、対照群には「その風景の特徴を想像する」ように指示した。人間性の認識は、独自性特性と非独自性特性を用いて評価した。その結果、実験群は対照群よりも独自性特性において明確に優れており、仮想接触の効果が確認された。

Razpurker - Apfeld & Shamo - Nir (2020) は、イスラエル内の2つの集団、すなわち多数派のユダヤ人と少数派のアラブ系イスラム教徒の間で、仮想接触が集団間の不安と偏見に及ぼす影響を調べた。128人のユダヤ人と128人



のアラブ系イスラム教徒の参加者は、外集団のカジュアルな服装の人物（弱い識別）または宗教的衣装を身に着けている人物（強い識別）とのカフェテリアにおける楽しい会話（カフェテリア条件）、またはその人物の楽しいハイキング（ハイキング条件）を想像した。その後、参加者は集団間の不安と偏見に関する質問票に記入した。ハイキング条件のユダヤ人参加者は、強い識別の外集団の人物を想像した後で高い集団間不安を示したが、それはカフェテリア条件での想像の後に解消された。またユダヤ人参加者は、弱い識別の人物と比較して強い識別の人物を想像した後でより多くの偏見を報告した。一方、アラブ系イスラム教徒の参加者については想像の効果は見られなかった。仮想接触において外集団の人物の特徴を考慮することの重要性が主張される。

堀川と岡（2017）は、レズビアンを外集団とした場合に仮想接触の効果がえられるかを検討した。女性異性愛者の参加者を、初対面の女性同性愛者との接触を想像する実験群と一般女性との接触を想像する対照群に振り分けた。実験群は対照群に比べて集団間不安尺度得点は低かったが、不安感を測るために設置させた2脚の椅子の距離には条件間差は見られなかった。

梅村（2018）は、大学生と大学院生を対象に、仮想接触は外国人に対するイメージと行動に如何なる影響を与えるかを調査した。その結果、外国人に対するイメージが低くかつ接触経験が乏しい参加者には効果をもたらすものの、イメージが高く接触経験が豊富な参加者には効果を与えにくいとの結論に至った。仮想接触は偏見の抑制に向けた第一段階であると指摘してきた従来の見解を支持する結果である。

Firat & Ataca（2020）は、これまでの研究から明らかになった矛盾を解決するために、トルコ人の大学生を参加者としてクルド人とシリア人に対する顕在的および潜在的な偏見に対する仮想接触の効果を調査した。しかし、対象に対する偏見の緩和効果は示されなかった。仮想接触は如何なる条件で機能するかについて今後の研究が必要だとされる。

Burrell（2015）は、バイセクシュアルの男性は異性愛者と同性愛者の両方からの偏見に直面し、彼らが受ける否定的な態度はストレスとしてうつ病や自殺のリスクを増加させると考え、仮想接触による偏見低減を試みた。参加者は、アメリカ、ジョージア州の51名の大学生（女性65%、男性35%、50名は異性愛者、1名がバイセクシュアル）で、彼らは第三者の視点から初対

面のバイセクシュアル男性に会うことを想像する実験群、または自然の場面に想像する対照群に割り当てられた。参加者は次に、集団間の不安、外集団への評価、態度、将来の接触意欲について報告した。結果は、どの領域においても実験群と対照群の間に有意差は生じなかった。ただし、仮想接触の効果は参加者の性別によって異なった。対照群では男性よりも女性の方が外集団に対する評価は良好だったが、実験群では性差は現れなかった。この結果は、性別は性的指向に関する偏見に影響することを示している。

これまで見てきた最新の接触仮説研究事例の抜粋から示唆されるのは、内集団と外集団の間に深い対立がある場合、または外集団に対する憎悪の感情の中で生きてきた者には効果が現れにくいことである。また、参加者をマジョリティとマイノリティの双方から設定する場合、後者にとっての仮想接触の効果は限定的である可能性が高い。

## 結論

現代社会において偏見の問題は社会的かつ科学的関心の中心を占めており (Ferguson, et.al. 2019), それは最大の難問の一つである。人種、宗教、ジェンダー、性的自認、信条、経済状況が異なる者に対する偏見を火種として生まれる差別の問題は、収束する気配を見せないどころか世界を覆い混迷の度を深めている。偏見は正しい知識の欠如から生まれるが情動的側面も強いために、反証する事実に接するだけでは低減されにくい。望ましい接触体験をシミュレートすることによって肯定的な感情を生み出すと考えられる仮想接触仮説には、認知面だけに焦点を当てるアプローチ以上の成果が期待される。異なる人種への偏見の場合、一般的日本人が置かれている環境では直接的接触の機会を得る者は極めて限定的であることから、仮想接触仮説は我が国においても有効なアプローチとして期待される。

その一方で、これまでの研究事例を精査すると検討されるべき今後の課題も浮かび上がる。それらは以下の4点に集約される。

### (1) 外集団に関する知識の供給

接触が困難な状況において仮想接触は有効とされる、そうした状況においては想像する側に外集団のメンバーについての知識が存在しない場合もあり得る。一定の知識に基づかなければリアリティのある肯定的接触を想像することはできないだろうし、不正確な情報は偏見を強化することになりかねな

い。しかしこれまでの研究の多くは、外集団についての正確な情報をどのように供給するかに関して考慮していない。

#### (2) 想像内容の吟味

参加者は肯定的交流を想像するように指示されるだけで、想像は各自に委ねられている。参加者によって想像内容は異なるはずだが、その内容は吟味されない。個々が想像する接触の肯定的度合いには差があり、その差は偏見の低減に影響を与えるはずだ。そこで、参加者が想像した交流内容を記述させ、それを分析して参加者を肯定度強と肯定度弱の2つのグループに分ける。前者の偏見が低減する割合がより高ければ、仮想接触の有効性をより主張できるだろう。

#### (3) 想像のシステム化

仮想接触はメンタル・トレーニングの一種だと考えられる。それは自己の精神状態をコントロールしていかなる状況でも高いパフォーマンスを引き出すことをめざす訓練である。それは心理学を基盤にシステム化されているが、仮想接触仮説の研究においては、望ましい接触を想像せよとの指示が与えられるだけで、想像の仕方は参加者各自に任されてきた。想像を最適化するためには仮想接触においてもシステム化、すなわち適切な手順の詳細を策定する必要があるだろう。

#### (4) 効果の持続性

効果の継続期間、長期継続のための条件、実際の接触が実現するに至ったか否かが示されていない。まずは遅延テストの実施により、効果の持続性の検討が求められる。

文化的同質性が高いと言われてきた日本人に異質性との対峙が求められている。信条、体験、理想を共有しない者同士が出会う時に偏見が生まれやすい。その結果として生じる誤解や不信感は摩擦や対立へと発展する。異文化間コミュニケーション研究にとっては、これまで明らかになった仮想接触仮説の問題点を踏まえつつ、その可能性を追求することが喫緊の課題である。

### 参考文献

- Allport, G. W. (1954). *The Nature of Prejudice*. Cambridge, New York: Doubleday Anchor Books.
- Amir, Y. (1969). Contact hypothesis in ethnic relations. *Psychological Bulletin*, 7 (71),

319-342.

- Bandura, A. (1986). *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice- Hall, Inc.
- Bandura, A., & Schunk, D. H. (1981). Cultivating competence, self-efficacy and intrinsic interest through proximal self-motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 586-598.
- Brown, R., & Hewstone, M. (2005). An integrative theory of intergroup contact. *Advances in Experimental Social Psychology*, 37, 255-331.
- Burrell, H. C., (2015). The Effects of Imagined Intergroup Contact on Attitudes Towards Male Bisexuals. *University Honors Program Theses*. 134. <https://digitalcommons.georgiasouthern.edu/honors-theses/134>
- Crisp, R. J., & Turner, R. N. (2009). Can imagined interactions produce positive perceptions? Reducing prejudice through simulated social contact. *American Psychologist*, 64, 231-240.
- Dovidio, J. F., Kawakami, K., & Gaertner, S. L. (2002). Implicit and Explicit Prejudice in Interracial Interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82(1), 62-68.
- Falvo, R., Capozza, D., Di Bernardo, G. A., & Pagani, A. (2015). Can imagined contact favor the “humanization” of the homeless? *Testing, Psychometrics, Methodology in Applied Psychology*, 22, 23-30.
- Fan, C., & Mak, A. (1998). Measuring social self-efficacy in a culturally diverse student population. *Social Behavior and Personality*, 26, 131-144.
- Feltz, D. L., & Riessinger, C. A. (1990). Effects of in vivo emotive imagery and performance feedback on self-efficacy and muscular endurance. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 12, 132-143.
- Ferguson, M. A., Branscombe, N. R., & Reynolds, K. J. (2019). Social psychological research on prejudice as collective action supporting emergent ingroup members. *British Journal of Social Psychology*, 58(1), 1-32.
- Firat, M., & Ataca, B. (2020). When does imagined contact reduce prejudice? No evidence that in-group identification moderates the imagined contact effect. *Social Psychology*, 51(4), 254-266.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4-27.
- Greenwald, A. G., McGee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- Gudykunst, W. B., & Nishida, T. (1986). The influence of cultural variability on

- perceptions of communication behavior associated with relationship terms. *Human Communication Research*, 13, 147-166.
- Harwood, J., Paolini, S., Joyce, N., Rubin, M., & Arroyo, A. (2010). Secondary transfer effects from imagined contact: Group similarity affects the generalization gradient. *British Journal of Social Psychology*, 50, 180-189.
- Hodson, G., Harry, H., & Mitchell, A. (2009). Independent benefits of contact and friendship on attitudes toward homosexuals among authoritarians and highly identified heterosexuals. *European Journal of Social Psychology*, 35, 509-525.
- Husnu, S. & Crisp, R. J. (2010a). Elaboration enhances the imagined contact effect. *Journal of Experimental Social Psychology*, 46, 943-950.
- Jones, M. V., Mace, R. D., Bray, S. R., MacRae, A. W., & Stockbridge, C. (2002). Impact of motivational imagery on the emotional state and self-efficacy levels of novice climbers. *Journal of Sport Behavior*, 25(1), 57-73.
- Landau, J.D., Libkuman, T.M., & Wildman, J.C. (2002). Mental simulation inflates performance estimates for physical abilities. *Memory & Cognition*, 30, 372-379.
- Levin, S., van Laar, C., & Sidanius, J. (2003). The effects of ingroup and outgroup friendships on ethnic attitudes in college: A longitudinal study. *Group Processes and Intergroup Relations*, 6, 76-92.
- Pettigrew, T.F. & Tropp, L.R. (2006). A meta-analytic test of intergroup contact theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90(5), 751-783.
- Plant, E. A., & Devine, P. G. (2003). The antecedents and implications of interracial anxiety. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 790-801.
- Razpurker - Apfeld, I., & Shamo - Nir, L. (2020). Imagined contact with strongly identified outgroup members: Do religious trappings make the man? *Asian Journal of Social Psychology*. 23 (4), 384-396.
- Stathi, S. & Crisp, R. J. (2008). Imagining intergroup contact promotes projection to outgroups. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 943-957.
- Stathi, S., Crisp, R. J., & Hogg, M. A. (2011). Imagining intergroup contact enables member-to-group generalization. *Group Dynamics: Theory, Research & Practice*, 15, 275-284.
- Stathi, S., Cameron, L., Hartley, B. & Bradford., S. (2014). Imagined contact as a prejudice-reduction intervention in schools: the underlying role of similarity and attitudes. *Journal of Applied Social Psychology*, 44, 536-546.
- Turner, R. N., Crisp, R. J., & Lambert, E. (2007). Imagining intergroup contact can improve intergroup attitudes. *Group Processes and Intergroup Relations*, 10, 427-441.
- Turner, R. N. & Crisp, R. J. (2010). Explaining the relationship between ingroup

- identification and intergroup bias following recategorization: A self-regulation theory analysis. *Group Processes and Intergroup Relations*, 13, 251-261.
- West, K., Holmes, E., & Hewstone, M. (2011). Enhancing imagined contact to reduce prejudice against people with schizophrenia. *Group Processes & Intergroup Relations*, 14, 407-428.
- Wright, S. C., Aron, A., McLaughlin-Volpe, T., & Ropp, S. A. (1997). The extended contact effect: Knowledge of cross-group friendships and prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 73-90.
- Shamloo, S. E., Carnaghi, A., Piccoli, V., Grassi, M., & Bianchi, M. (2018). Imagined intergroup physical contact improves attitudes toward immigrants. *Frontiers in Psychology*, 9, 1-9. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2018.01685>
- Tropp, L. R. (2006). Stigma and intergroup contact among members of minority and majority status groups. In S. Levin & C. van Laar (Eds.), *Stigma and group inequality: Social psychological perspectives* (171-191). Mahwah, N.J.: Erlbaum.
- Greenwald, A. G. & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4-27.
- Vezzali, L., Crisp, R. J., Stathi, S., & Giovannini, D. (2013). The affective consequences of imagined contact: A review and some suggestions for future research. *TPM*, 1(20), 343-363.
- 梅村重之 (2018). 「仮想接触による外国人への差別的行動の好意的変化—個人特性と仮想内容の変化によるプロセスに着目して—」愛知教育大学学術情報リポジトリ [https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=6451](https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=6451)
- 堀川佑惟, 岡隆 (2017). 「レスビアンに対する女性異性愛者の態度に仮想接触が及ぼす効果」『日本心理学会大会発表論文集』81 (0), 1A-016-1A-016.